

【海外留学レポート】

カナダのロンドンから
-ある経済学大学院生の留学記録-

From London, Canada:
Study Abroad Report by a Graduate Student in Economics

ウェスタン・オンタリオ大学経済学部博士課程 小野塚 祐紀

ONOZUKA, Yuki

(Ph.D. candidate in Economics, University of Western Ontario)

キーワード：博士課程留学、経済学

はじめに

私はカナダにあるウェスタン・オンタリオ大学経済学部博士課程に所属し、早いもので現在四年目になる¹。経済学をやっていると言うと経済成長や景気循環、株価や金利のことを研究していると思われることがほとんどだが、このようなことは私はまったくやっていない。経済学は社会科学に属しており、いわゆる「経済」のみに拘らず、広く人間の社会行動を分析する学問である。私が専門分野としている労働経済学、教育経済学では、賃金格差や労働供給、教育のリターンの分析などが伝統的に行われているが、その他にも様々なことが分析対象となっている。私自身は人的資本の特徴づけや男女間格差といったことに興味を持ち研究を行っている。

私は留学当初から日本学生支援機構(JASSO)の海外留学支援制度(大学院学位取得型)(旧名称:海外留学支援制度(長期派遣))を戴いており、その縁でこの海外留学レポートの執筆依頼を頂いた。本稿では、一経済学大学院生が、なぜそれまで所属していた日本の大学院を飛び出しこちらの博士課程に入ったのか、こちらでどのような生活を送っているのか、ということを中心に述べていきたい。

留学決意、留学先決定まで

私は学士号、修士号を一橋大学経済学部から取得し、博士課程二年目の夏にこちらへとやってきた。留学を決意したきっかけについて、他の方のようにかっこよく書ければいいのだが、残念ながらそれほどかっこいい理由はない。経済学の場合は、アメリカが現在中心であることや国際的な競争が激し

いこともあって、海外の博士課程に入ることは特に珍しいことではなく、私もそれに倣った感じではある。もちろん、ただ単純に他の人が留学しているから留学したわけではない。最近変わってはきたものの、日本人が伝統的に強い理論分野と比較して、私が専門としている労働経済学は日本では正直あまり人気がない。一方、北米に目を向ければ、労働経済学は花形分野で非常に活発に研究が行われている。「このまま日本にいて自分が自分として納得できる研究者になれるのだろうか」という不安を覚えていた私は、現状を変えるべく留学を決めたのである。

先ほど、現在の経済学を中心はアメリカだと書いた。そのため、なぜアメリカではなくカナダの大学院に入ったのかと思われる方もいるかもしれない。何を隠そう、私も当初自分はアメリカに行くのだらうと予想していた。一般に博士課程へ留学といった場合、就きたい教授に連絡を取り、許可ができればその教授の元に就いて研究をすることになるらしいが、経済学の場合は大きく異なる。一部ヨーロッパの大学でそのような制度が残っているが、アメリカ型のプログラムの場合には博士課程とはいえ入ってすぐに研究に取り掛かることはなく²、一年目、二年目と授業の履修が主体で、三年目以降に正式に専門分野を決め、指導教授を選択する。入試も他分野とは大きく異なっていて、可否には学部の成績もかなりの割合を占めてくると言われている。出願数も日本から留学する人の間では10校前後は当たり前で、どこに受かるか不確実性もかなり大きい。そのため、受かった大学の中から一番よさそうなところを選んでいくというのが現実である。私は推薦者の一人にウェスタン・オンタリオ大学（以下、ウェスタン）を薦めていただき出願したが、他にも多数の大学に出願しており、ウェスタンはそのうちの一つに過ぎなかった。

入試の結果が出そろい、合格した大学の中から私はウェスタンに行くことに決めた。決め手となったのは労働経済学の分野での教授陣の厚さである。ウェスタンの経済学部は決して大きなプログラムではないが、私が専門としている労働経済学では安定した層の厚さを誇っている。こちらでは教授の大学間移籍は激しいので、一人の教授に着目するよりも分野として強いプログラムを選ぶ利点は大きい。このようにしてカナダへの留学が決まったのである。

ウェスタン・オンタリオ大学での研究生活

以上のような経緯で留学に至ったウェスタンだが、当大学についてご存知でない方も多いかと思うので簡単に説明したい。ウェスタンは、カナダ、オンタリオ州のロンドン市にある。ロンドンは、カナダ最大の都市であるトロントから南西へ車で約2、3時間のところに位置している。「ロンドン」という名前はイギリスのロンドンに由来し、街にはテムズ川も流れている。ただし、こちらのロンドンは人口約40万人、そのうち約1割がウェスタンの学生という学園都市であり、本場のロンドンとは比べ物にならないほど田舎である³。そのせいもあってか街や大学には日本人がとても少なく、ウェスタンの日本での知名度はとても低い。ビジネス学部は国際的に有名であり、経済学部もカナダではト

ロント・UBC・クイーンズとともにトップ4に入ると言われている。

ウェスタンの経済学博士プログラムの大まかな流れは以下の通りである。一年目はコア・コースと呼ばれる一連の必修科目群を履修する。これらは今後経済学をやる上で必要最低限の知識や技術を身に着けることを目的としている。二年目も授業履修が義務付けられており、自分の興味関心に基づき授業を選択する。三年目には指導教授と博士論文コミッティーメンバーを選定し、以後研究に集中することになる。大部分の学生は6年かけて博士号を取得している。

いくつか一橋の大学院との違いを挙げてみたい。まずは二年目の授業の豊富さである。二年目の授業は担当の教授自身が専門としている事柄を軸に、基礎となった論文からそれこそワーキングペーパーやジョブマーケットペーパーといった最新の論文まで、重要な論文をカバーする。そのため授業の種類というのは教授の多さと直結しているところがある。先に述べたようにウェスタンは労働経済学の分野は層が厚く、私の関心に近い授業が多数開講されていた。一橋大学では二つしか労働経済学の授業がなかったことを考えると非常に恵まれた環境である。また、ワークショップでは地の利を生かして北米を中心に様々な研究者が発表に来る。論文でしか知らない超大物経済学者がやって来ることもたまにある。普通のワークショップとは別に大学院生向けのものも行われ、一対一で話す機会を提供されることもある。これらは非常に貴重な機会である。

研究の進め方は、自身での作業、教授との話し合い、研究発表、を繰り返し行うという点においては一橋と違いはない。ただしゼミがない分、教授との一対一の関係が強調され、更に言えば、いつミーティングを持つかといったことに始まり、より学生側に主体性が求められる場合が多いように感じられる。「先生」として指導を受けるというよりも、同じ分野の先輩として意見を求めるという姿勢のほうが相応しいのかもしれない。それから、研究を効果的に他人に伝えること、特に口頭発表のスキルが非常に重要視される。日本では、「いい研究であればプレゼンテーションがだめでも理解してくれる人がある」とする風潮があったりもするが、こちらでは、「例えよい研究であっても伝え方が悪かったら誰も理解しないし、それ以上知ろうとしてもくれない」という非常に現実的なスタンスである。これは私も現在とても苦勞しているところである。日本人は効果的に他人に物事を伝える訓練をしっかり受けていないのでカナダ人らと比べて劣りやすい。留学を目指している人はぜひ今から訓練してほしい。

研究内容

せっかくの機会なので、私の研究内容について少しだけ述べたいと思う⁴。はじめに述べたように、私は労働経済学、教育経済学の分野を専門としている。こちらに来る前は男女間格差を中心に研究を行っていた。今でも男女間格差の問題には強い関心は持っているものの、こちらで人的資本の意味での教育と労働市場の接続に興味を持ち始めた。人的資本とは、人が持っているもので、それをを用いて

財を生産すると考えられている概念的なものである。経済学では生産された財に応じて労働者は賃金を受け取る、という考え方をする。人的資本は教育やトレーニングを通じて蓄積されると考えられている。「人的資本の意味での教育と労働市場の接続」として私が意味しているのは、教育を通じて人はどのような人的資本を蓄積しているのか、その人的資本は仕事においてどのように使われているのか、ということである。その中でも私が今特に注目しているのが大学専攻分野による人的資本蓄積の異質性である。

かねてより教育グループ間、例えば大卒者と高卒者間、では収入や健康状態など様々な格差が知られていて、教育が与える効果について非常に多くの研究が行われてきた。しかし近年、日本を含め多くの先進国において大学進学率が高くなっており、それに伴って大卒者内での格差が注目されてきている。大卒者内で違いをもたらす要因の一つとして考えられるものには専攻分野がある。多くの国で専攻分野による賃金の違いというのは指摘されており、最近のアメリカのレポートでは、一番高い学部と一番低い学部の生涯収入の差は大卒、高卒間の差よりも大きいと報告されている (Carnevale et al. 2015⁵)。元々優秀な人が「稼げる」学部に行くことも要因の一つであろうが、先行研究はその要因を制御した上でも賃金リターンに差があることを指摘している。

その他に差をもたらす要因として、大学で蓄積する人的資本が種類や量の意味で専攻分野によって異なる可能性が考えられる。大学で履修する授業、学ぶ内容は専攻分野によって大きく変わりうる。例えば文学部と工学部では似ているところを探すことすら難しいかもしれない。私が知りたいことは、本当に専攻分野によって蓄積される人的資本が異なるのか、異なるとしたらどのように異なるのか、蓄積された人的資本は就く職業によってどのくらい使われ方が異なるのか、そして人的資本の蓄積の違いが大卒者内の賃金格差をどのくらい説明するのか、ということである。これは学部の役割を理解する上でも重要であると考えている。

現在はデータのリッチさからアメリカのデータを用いて分析を進めているが、日本のデータを用いての分析も将来的には行いたいと思っている。日本の就活では出身学部は関係ないと言われていたりするが、その一方で、受験の際に親が子供に文学部になんか行ったら就職先がないとアドバイスをしていたりする。学部の役割についてはまだまだよくわからないことが多い。

おわりに

この雑誌の読者には、大学の国際課といった留学支援業務に携わっている方の他にも、海外留学に興味のある学生もいるのだろうか。本稿はある一人の経済学博士課程大学院生の留学体験記であり、あくまで一つの事例である。留学のスタイルというのは目的によって大きく違ってくる。私は博士号取得を目的としてこちらに来ているので、ほぼ毎日オフィスに来て論文を読んだりパソコンの前で作業したりという生活で、一般の人から見たらあまり刺激的でない生活を送っているように思われるか

もしれない。もちろん私の性格も影響してはいるが、学部時代にドイツへ一年間留学していた時はまったく違った留学ライフを送っていた。それこそ国内外を旅行したり、いろんな国の人たちと友達になったり、地元のスポーツチームに所属したりと、ドイツ文化を満喫するような生活を送っていた。同じ人間でも目的が違えばここまで違う生活を送るわけである。これから留学する人たちは自分の目的にあったスタイルを見つけて充実した留學生活を送ってもらいたい。

私は、海外留学で必ずしも人生が好転するとは考えていないし、全ての人が留学すべきだとも考えていない。ただ、留学によって環境が大きく変わるので、自分の現状を変えるチャンスがたくさんあることは確かである。もし何か自分を変えたいと強く思うのであれば、留学をしてそのチャンスをものできるようがんばるのはありではないだろうか。

最後に、幸運にも私はウェスタンでの一年目から JASSO の海外留学支援制度（大学院学位取得型）を利用させていただいている。この奨学金のおかげで今まで TA 業務に時間を取られることなく研究を行うことができ、留学前から行っていた研究をこちらで完成させ、二本の論文を査読雑誌にも載せることができた。また一橋大学の国際課の方々には JASSO との連絡窓口として度々お世話になっておりとても感謝している。これから残り少ないであろう留學生活を気を引き締めてやっていきたいと思う。

おまけ：ロンドン生活

おまけとしてここロンドンでの生活についても少し述べておこう。博士課程となると学部生とは違って、毎週末バーに繰り出したりパーティーをしたりという生活にはならない。ウェスタンはカナダでは「パーティー大学」と呼ばれているが、博士の学生には関係のないことで、私は大体は、広いキャンパスの一角にある経済学部のエリアで毎日過ごしている。ロンドンでは車を持たなくても一応生きていけるのだが、市内の公共交通機関はバスしかない。ルートによっては本数も少ないため⁶必要以上に外出する気が起きないのだが、たまに他の学生や友達とごはんを食べに行くことはささやかな楽しみである。

それから冬はとても寒い。今年の冬はかなりマイルドだったが、例年はマイナス 20 度ぐらいになる。湖の近くのため雪も非常に多い。東京生まれ東京育ちの自分にとってはなかなか辛い。一年目の冬はも



写真 1 冬のロンドン。このぐらいの雪は珍しくない。

のすごい寒波にあたってしまい、11月下旬から4月上旬まで毎日スノーブーツを履いて登校、一度マイナス35度になるからと大学が休みになったこともあった⁷。

ネガティブなことを書いたが、ロンドンにもよいところはある。まずは治安がよい。もちろんエリアによるが、基本的には夜中一人で歩いていても問題ない。治安は良いに越したことはない。それから自然が豊かである。ロンドンは別名「森のまち」と呼ばれている通り、緑が多い。動物も身近に見ることができ、カナダギースやグラウンドホッグはもちろんのこと、うさぎや鹿なども道端で見かけることがある。日本でみたことのないカラフルな鳥も多い。このような生き物を見かけると、疲れ切った心も和むというものである。私がロンドンで一押しなのは遊歩道/自転車道である。自然豊かで景色のよいところを走っているの、天気の良い日にでもぼんやりと散歩するのは非常におすすめである。



写真 2 カナダギースの親子連れ。あちこちに糞が落ちているので歩く時は要注意。

¹ ちなみに2012年1月26日から、マーケティング戦略の一環として、ロゴやウェブサイト等で「Western University」を使用するようになっている。しかし、法的な名称は変わっておらず、また私の学部の教授陣もみな「University of Western Ontario」を使用しているので、私も「ウェスタン・オンタリオ大学」と呼ぶことにする。

² プログラムとしてはないということで、個人で進めている人はもちろんいる。

³ オンタリオ州のロンドン、というのはカナダ人の間でもネタになる。一度日本から届いた書類でイギリス宛にされたものがあった。

⁴ 私がどのような研究を行っているか興味のある方は私のホームページを参照してほしい。3月14日現在ホームページはまだ作成していないが、近日中に作成予定である。

⁵ Carnevale, Anthony P., Cheah Ban & Andrew R. Hanson, (2015) “The Economic Value of College Majors,” Reports, Center on Education and the Workforce, Georgetown University.

⁶ ちなみに私の家の近くを走っているバスは、あっても30分に一本しかない。

⁷ その結果、「一年目よりはまし」というのがそれ以降クラスメート内での毎年冬の決まり文句となっている。